

短期大学リハビリテーション学分野における授業評価と 科目成績の関連

RELATIONSHIP BETWEEN CLASS EVALUATIONS AND COURSE GRADE IN DEPARTMENT OF REHABILITATION OF JUNIOR COLLEGE

遠藤 康裕 ・ 三浦 雅史

ENDO Yasuhiro, MIURA Masashi

キーワード：授業評価、成績、授業改善

Key words : class evaluation、course grade、class improvement

要 旨

- 【目的】短期大学リハビリテーション学分野における、学生による授業評価と教員による学生評価である科目成績の関連を明らかにするために、授業改善アンケートおよび科目成績としての試験成績、GP (Grade Point) を解析し、関連を検討した。
- 【方法】令和元年度の仙台青葉学院短期大学リハビリテーション学科理学療法学専攻、作業療法学専攻の129科目を対象とし、GP・最終成績点数と授業改善アンケートの各項目の平均値の関連を検討した。
- 【結果】授業改善アンケートと科目成績の間に明らかな相関は認められなかった。
- 【考察】本学科においては学生の授業に関する意欲や興味、満足度が高いことと成績は関連しないことが示唆された。
- 【結論】学生の満足度や自覚的な理解度を高める方策と学修到達度を高める方策の両面から授業の改善が必要であると考えられた。

Abstract

- 【Introduction】 The purpose of this study was to clarify the relationship between class evaluations by students and course grade in the department of rehabilitation at junior colleges.
- 【Methods】 The relationship between the GP (Grade Point) and the final course grades and the

average of each item of the class evaluations for 129 subjects of the Department of Physical Therapy and Department of Occupational Therapy of Sendai Seiyō Gakuin College investigated. 【Results】 No clear correlation was found between the course evaluations and the course grades of students.

【Discussion】 In this department, it was suggested that students' high motivation, interest, and satisfaction in class are not related to their grades.

【Conclusion】 It was considered necessary to improve the lesson both from the perspectives of increasing student satisfaction and awareness, and of improving the level of educational achievement.

【はじめに】

今日、大学への入学者に関して受験人数の減少や入学者の質の広範化が言われ、時代の変化に伴う教育改革の必要性も高くなっている。1980年代から授業や講義に対する学生からの不満がさまざまな大学で起こり、授業改革は全国的な喫緊の課題になった。また学生の質の変化により、教員も講義や学生指導に困難さを訴えるようになり大学教育改革につながった。個別の授業に関しても、様々な改善が必要となりFD（Faculty Development）が活発になっている。授業の改善のためには受け手である学生からの声を聞くことが重要であるという視点から、学生による授業評価が行われるようになった¹⁾。文部科学省の調査によると、平成29年度には学生による授業評価を実施した大学は、国立約100%、公立約98%、私立約99%、国公立全体で約99%であった²⁾。つまり日本国内のほとんどの大学で行われている。その一方で学生による授業評価を有効に活用しているとはいえない現状もある。むしろ、大学教員のなかには否定的な意見も聞かれる³⁾。

一方で大学の授業は一定の知識技術を学生に獲得させることが目的であり、学士課程における良い教育実践のための7原則として、①学生と教員との良好な関係、②学生同士の協働、③アクティブ・ラーニング、④迅速なフィードバック、⑤適切な課題の設定と締切の順守、⑥高い要求水準、⑦多様な能力と学習法の尊重がある⁴⁾。また、単に学習時間が長いことが達成感や目標到達を促進

するのではなく、授業態度という学習意欲を介し、授業態度の改善には、シラバスの有用性と適切な授業学習の設定が影響したとも報告されている⁵⁾。学生の成績と授業評価の関連についても研究が散見される。Feldman⁶⁾によると、学生による授業評価と成績との間には高い正の相関が認められた。成績が良い学生では、学修積極性が高く、成績が低い学生では学修積極性が低いとも言われている⁷⁾。

本学リハビリテーション学科では、令和元年度のFDとして過年度のGPAの分析を行い、科目分野毎、科目毎、国家試験成績との関連等から成績評価の方法・難易度の妥当性、今後の改善点について検討してきた。その中の課題として、学生の授業満足度と科目成績の乖離があるのではないかということが挙げられた。本学科内の意見としても、先行研究同様に学生の授業満足度は「楽しい」「試験が簡単」といった視点での評価が多く、本来の授業に取り組む意欲や将来へのつながりといった点での満足度とは異なっている傾向にあるのではないかということが指摘された。本研究では、短期大学リハビリテーション学分野における、学生による授業評価と教員による学生評価である科目成績の関連を明らかにすることを目的とし、授業改善アンケートおよび各科目の最終成績の点数、GP（Grade Point）を解析した。

【対象および方法】

調査対象は、令和元年度の仙台青葉学院短期大学リハビリテーション学科理学療法専攻、作業

療法学専攻の1～3学年における科目のうち、臨床実習を除いた129科目を対象とし、前期・後期の授業改善アンケート結果、各科目の最終成績の点数、GPを用いた。GPおよび科目の成績は、入試・教務データ使用申請書を提出し承認を得たのちに、教務事務よりデータを収集した。本学のGPは科目成績が100点満点中90点以上で4、80～89点で3、70～79点で2、60～69点で1、60点未満で0としている。授業改善アンケートはFDネットワークつばさにて公表されている該当科目の平均値データを使用し、そのうち表1の11項目を使用した。本研究は仙台青葉学院短期大学研究

倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：0210）。

統計学的解析では、各科目のGPについて平均値、標準偏差、四分位範囲、最大値・最小値を算出した。また、各科目の最終成績の点数について平均値、標準偏差、最大値・最小値を算出した。その後、Shapiro Wilk検定により正規分布の判定を行い、GP・最終成績点数と授業改善アンケートの各項目の平均値の関連をPearsonの積率相関係数を求めて検討した。統計学的解析は統計解析ソフトIBM SPSS Statistics 27（IBM社）を使用し、有意水準は5%とした。

表1 授業改善アンケートの設問内容

| 設問内容 | 本文中項目名 |
|----------------------------------|-----------|
| この授業に意欲的に受講しましたか | 意欲 |
| この授業の内容を理解できましたか | 理解 |
| 考え方、能力、知識、技術などは向上しましたか | 向上 |
| 自ら学ぶ意欲は湧きましたか | 自発的 |
| 自ら進んで課題を発見し、探求する力が身につきましたか | 探求 |
| 教員に熱意は感じられましたか | 熱意 |
| 教え方（教授法）はわかりやすかったですか | 教え方 |
| 教員の一方的な授業ではなく、コミュニケーションはとれていましたか | コミュニケーション |
| 板書や配布物、提示資料は読みやすかったですか | 板書 |
| 教員は教室内の勉学の環境を良好に保つよう、配慮していましたか | 環境 |
| この授業を総合的に判断すると良い授業だと思いますか | 総合 |

表2 GP、最終成績点数の記述的統計結果

| | 平均値 | 標準偏差 |
|------|------|-------|
| GP | 平均 | 2.24 |
| | 最小値 | 0.80 |
| | 25%値 | 1.66 |
| | 50%値 | 2.20 |
| | 75%値 | 2.90 |
| | 最大値 | 3.64 |
| | 成績点数 | 平均 |
| 最小値 | | 55.50 |
| 25%値 | | 69.85 |
| 50%値 | | 76.53 |
| 75%値 | | 82.92 |
| 最大値 | | 92.35 |

【結果】

学科及び、専攻・コースの学期毎の平均 GP、最終成績の点数、授業改善アンケートの結果は表 2、3 の通りである。

授業改善アンケートの結果と GP の関連では、GP 平均と授業改善アンケートの「探求」が有意な負の相関を認め、GP 最小値が「理解」、「熱意」、「教え方」、「板書」、「環境」、「総合」と有意な正の相関、GP25%値と75%値が「自発的」、「探求」、「環境」と有意な負の相関を認めた(表4)。

成績点数との関連では、点数平均と「自発的」、「探求」、「環境」の間、点数最大値と全ての項目間に有意な負の相関を認めた(表5)。

【考察】

星野ら⁸⁾によると、学生の満足度が高まることで、授業の理解度が増すとされている。つまり、授業改善アンケートでの学生満足度が高いほど理解度も高いことが仮説として立てられた。しかし、本学科においては、学生による自覚的な理解度が高いことと、授業の本来の目的である知識技術の習得度、理解度が高いことが相関するかは疑問であった。先行研究では学生による授業評価と成績との間には正の相関が認められている^{6, 9)}が、その関連は低いとする報告もある^{10, 11)}。

本研究の結果では、GP 平均値や四分位範囲と授業改善アンケートの平均値の間には有意な正の相関は認められなかった。GP 平均と「探求」および点数平均と「自発的」、「探求」、「環境」の間には有意な負の相関を認め、GP25%値と75%値、点数最大値でも同様に複数項目と負の相関を認めた。学生の授業に関する意欲や興味、満足度が高いことと成績は関連せず、むしろ反比例することもあるということを示唆している。有意な負の相関が認められた項目でも相関係数は極めて低く関連性が低いと考えられる。あえて、負の相関について考えると二つの側面があると考えられる。一つは、学生の満足度、自覚的な理解度が高いにもかかわらず成績は低いという考え方。二つは学生の満足

度・自覚的な理解度が低いにもかかわらず成績は高いという考え方である。前者に関しては、専門分野等の科目において意欲を持ち熱心に取り組むことで自覚的な理解度は高まる反面、到達目標や試験・課題の難易度は高く、試験成績やその他レポートなどの成熟度は到達目標に対して低くなるのかもしれない。総論科目や教養教育科目では授業への意欲や満足度はあまり高くないが、試験で求められる内容はある程度要点を絞るやすく成績は高くなる可能性が考えられる。また、成績が高い学生は授業評価を厳しくつけ、成績が低い学生は甘くつける傾向も指摘されている⁷⁾。本研究では学生個人の授業評価と成績の関連について述べることは難しいが、本学科の学生においても同様の傾向がある可能性も考えられる。

一方、GP 最小値は授業改善アンケートの「理解」、「熱意」、「教え方」、「板書」、「環境」、「総合」と有意な正の相関を求めた。先行研究でも明らかに成績の悪い学生は授業評価が低い¹²⁾とも言われており、科目でみた場合にも同様のことがいえる可能性が示唆された。GP 最小値については、0 もしくは1となっており、0の科目は単位未修得者が存在し、1の場合は全学生が単位修得できたことを意味する。GP の下限は学生の自覚的な理解、熱意、教え方、板書、環境を向上させることで上昇させる可能性が考えられる。積極的な動機を持たない学生においては、理解度が満足度に与える影響が大きいことや、授業内でコミュニケーションを図ることで学生努力を促すことができるとされている⁸⁾。教授努力が満足度を高め、学生の理解度を高める面もある⁸⁾。ゆえに、成績不良による留年者や退学者を出さない科目運営としては、学生の自覚的な理解度、教員の熱意、板書・配布資料の工夫、環境設定などの教授努力と十分なコミュニケーションが重要になると考えられる。

本来、授業改善アンケートは授業の質を高め学生の理解度・学修度を高める目的がある。しかし、本研究の結果からは、授業改善アンケートの点数を高める、つまり学生の授業に対する満足度や自覚的な理解度を高める方策と科目の学修到達度を

表3 授業改善アンケートの記述的統計結果

| | 設問 | 平均値 | 標準偏差 |
|-------------|-----------|------|------|
| 授業改善アンケート設問 | 意欲 | 4.27 | 0.36 |
| | 理解 | 4.17 | 0.40 |
| | 向上 | 4.21 | 0.38 |
| | 自発的 | 4.17 | 0.42 |
| | 探求 | 4.11 | 0.42 |
| | 熱意 | 4.41 | 0.35 |
| | 教え方 | 4.24 | 0.47 |
| | コミュニケーション | 4.15 | 0.50 |
| | 板書 | 4.17 | 0.44 |
| | 環境 | 4.26 | 0.39 |
| | 総合 | 4.32 | 0.42 |

表4 授業改善アンケートと GP の相関

| | 平均 | GP | | | | 最大値 |
|-----------|-----------|---------|--------|---------|---------|---------|
| | | 最小値 | 25%値 | 50%値 | 75%値 | |
| 授業改善アンケート | 意欲 | | | | | |
| | 理解 | | 0.211* | | | |
| | 向上 | | | | | |
| | 自発的 | | | -0.185* | | -0.183* |
| | 探求 | -0.207* | | -0.193* | -0.175* | -0.256* |
| | 熱意 | | 0.230* | | | |
| | 教え方 | | 0.215* | | | |
| | コミュニケーション | | | | | |
| | 板書 | | 0.191* | -0.182* | | -0.193* |
| | 環境 | | 0.175* | | | |
| | 総合 | | 0.207* | | | |

Pearson の積率相関係数

*: p<0.05、**: p<0.01

表5 授業改善アンケートと最終成績点数の相関

| | 平均 | 成績点数 | | | | 最大値 | |
|-----------|-----------|----------|------|---------|---------|----------|----------|
| | | 最小値 | 25%値 | 50%値 | 75%値 | | |
| 授業改善アンケート | 意欲 | | | | -0.176* | -0.236** | |
| | 理解 | | | | | -0.242** | |
| | 向上 | | | | | -0.243** | |
| | 自発的 | -0.204* | | -0.183* | | -0.221* | -0.285** |
| | 探求 | -0.241** | | -0.198* | -0.215* | -0.280* | -0.328** |
| | 熱意 | | | | | | -0.209* |
| | 教え方 | | | | | | -0.218* |
| | コミュニケーション | | | | | -0.190* | -0.208* |
| | 板書 | -0.189* | | | | | -0.287** |
| | 環境 | | | | -0.175* | -0.224* | -0.278** |
| | 総合 | | | | | | -0.218* |

Pearson の積率相関係数

*: p<0.05、**: p<0.01

高める方策は別のものでとらえる必要があると考えられる。また、そもそもの授業評価の在り方や内容についても考える必要がある。Aleamori¹³⁾は、授業評価に対する教員の陥りやすい思い込みを指摘し、「神話」として16項目にまとめている。16項目とは、①学生は未熟で経験に乏しく気まぐれであるため、授業を正當に評価できない、②その分野において優れた研究業績と専門知識を持つ教員のみが、ピアレビューを行う資格がある、③多くの学生はフレンドリーなだけの教員を高く評価しており、学生授業評価は人気投票に過ぎない、④授業に対する正しい評価は、学生が大学を卒業して数年経たないと不可能である、⑤学生授業評価に用いられるアンケートは、学術的に信頼できない、⑥授業の受講者数が学生の評価が影響を受ける、⑦教員と学生の性別で、授業に対する評価が影響を受ける、⑧授業の開講時間帯が、学生の授業評価に影響を受ける、⑨必須科目か選択科目かによって学生の授業評価は異なる、⑩学生の専攻科目かそうでないかによって学生の授業評価は異なる、⑪学年間で学生の授業評価は異なる、⑫教員の職位（教授、准教授、講師など）で学生の授業評価は異なる、⑬成績が優秀な学生ほど授業や教師を高く評価する、⑭学問分野によって学生の授業評価の基準は異なる、⑮授業評価を行うには一つの質問項目があれば十分である、⑯学生授業評価では授業を改善する手懸りは得られない、である。ほとんどの研究では、これらの16項目が否定されている¹³⁾が、本学科の授業評価においては一部該当する可能性も本研究の結果からは否定できない。本研究の限界点として、授業改善アンケートが匿名で行われたものであり、個人を標本とした統計学的解析が行えなかったことが挙げられる。

入学者の質の広範化が言われる現在、学生の特性にはかなりの差があることが予測できる。そのため、学業成績に関連するとされている Internal vs External Control や、Locus of Control¹⁴⁾と呼ばれる概念に基づいた心理学的尺度¹⁵⁾、学修動機に関する詳細な調査¹⁶⁾等を併用し、授業改善ア

ンケートの内容や科目成績との関連の解析を深めることで、本学科の特徴をより明らかにできる可能性がある。

【結論】

本研究では、授業改善アンケートと科目成績の関連を検討し、対象学科においては明らかな相関は認められなかった。科目の学修到達度を高めるためには、授業改善アンケートに含まれる学生の自覚的な理解度、教員の熱意、板書・配布資料の工夫、環境設定などの教授努力と十分なコミュニケーションを向上させるとともに、学修に対する意欲や動機についても調査・アプローチする必要性が考えられた。また、授業評価の在り方や活用方法についても検討する必要があると考えられた。

【謝辞】

本研究は、令和2年度仙台青葉学院短期大学学長裁量研究費（0202、代表：三浦雅史）の助成を受けたものである。

【文献】

- 1) 安岡高志、高野次郎、他：学生による講義評価. 一般教育学会誌. 1986；8：46-59.
- 2) 文部科学省「平成28年度の大学における教育内容等の改革状況について」.
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1417336.htm (2020年7月17日)
- 3) 大槻博：多摩大学の学生による授業評価「ボイス」をめぐる考察. 一般教育学会誌. 1993；15：47-49.
- 4) Chickering AW: Seven Principles for Good Practices in undergraduate Education. Biochemical Education. 1989; 17: 140-141.
- 5) 黒川由美、古里由香里、他：授業外学習時間の増加は学生の学習意欲と達成感と高めるか：医学科の必修科目「ヒト生物学」を事例として. 医学教育. 2018；49：495-502.

- 6) Feldman KA: The association between student ratings of specific instructional dimensions and student achievement. *Research in Higher Education*. 1989; 30: 583-645.
- 7) 志垣一郎：学生による授業アンケートと成績の関連. *Memories of the Osaka Institute of Technology*. 2010 ; Series A 55 (1) : 1-9.
- 8) 星野敦子、牟田博光：大学生による授業評価にみる受講者の満足度に影響を及ぼす諸要因. *日本教育工学雑誌*. 2003 ; 27 : 213-216.
- 9) 牧野幸志：学生による授業評価と自己評価、成績、及び学生の満足感との関係～教養選択科目「社会心理学」の場合～. *高松大学紀要*. 2001 ; 35 : 1-16.
- 10) 安岡貴志、高野二郎、他：学生による講義評価～学生の質と講義評価の関係について～. *一般教育学会誌*. 1989 ; 11 : 56-59.
- 11) 安岡貴志、高野二郎、他：学生による講義評価～成績と講義評価の関係～. *一般教育学会誌*. 1989 ; 11 : 99-102.
- 12) 松田文子、三宅幹子、他：学生による授業評価と自己評価、授業選択態度、及び成績の関係～教職必修科目「生徒指導論」の場合～. *広島大学教育学部紀要 第一部 (心理学)*. 1999 ; 48 : 21-130.
- 13) Aleamoni LM.: Student rating myths versus research facts from 1924 to 1998. *Journal of Personal Evaluation in Education*. 1999; 13: 153-166.
- 14) Rotter JB.: Generalized expectancies for internal vs. external control of reinforcement. *Psychological Monographs*. 1966; 80: 1-28.
- 15) 鎌原雅彦、樋口一辰、他：Locus of Control 尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討. *Jap J of Educ Psychol*. 1982 ; XXX : 38-43.
- 16) 樋口一辰：児童の学修動機と学習達成場面での原因帰属様式. *学習院大学文学部研究年報*. 1986 ; 32 : 253-272.